

炎暑の一日、妹を誘って
県内の戦争遺産を巡るバス
ツアーに参加した。

顔触れは、戦争遺産を保存し平和を考えるため活動しているいくつものグループや研究者など高い志を持った方々だ。いつもの旅とは違って、静かに見学し祈りをささげようと思っていたが、テーマの重たさに戸

おんちの目

惑いと後ろめたさを覚えた。

訪れたのは、熊本市内の陸軍歩兵第13連隊の正門と食堂をはじめ、菊池市にある慰霊碑や飛行場跡に残る巨大な給水塔、油倉庫、格納庫の基礎……。焼き尽くされそうな炎天下に立つこれらの遺物たちの沈黙の重さ

音読のすすめ

沈黙の語り部たち 荒木仁子(89)主婦、宇土市

に圧倒された。
戦争の記憶、犠牲者への悼み、平和への感謝は持ち続けているが、あれから73年。どっぴり“今”に浸っている自分にあらためて気づかされた。

菊池飛行場ミュージアムの片隅で、「飛龍」の二文字が目飛び込んできた。それは県内から動員された中学生、女学生の仲間と造った飛行機の名前。敵地の飛行場に着陸して敵機を爆破する命を受けた若者たちを運んだとのこと。この名はまた、工場であった合同卒業式を襲った空襲、逃げ惑う私たちへの機銃掃射の乾いた音を思い起こさせた。
当時、すっかり姿を消していたささやかなお菓子が出撃する若者たちに振る舞われたという記事が悲しかった。